

☆☆ 連載短編小説 ☆☆

謎の「特設無線電話」

五房 NISHI 西 志郎

これは 6回読み切りの技術史風連載短編小説です。

何年か前、初めて数名の読者に公開したときは、一回分ずつ、メールマガジン風に配布しましたので、読者の楽しみを阻害しないよう、目次は省きました。新聞連載とは異なり、あとがきを先に読んでしまうことは止められません。付き合ってはられない、と投げた段階でそうなさることをお勧めします。どこで投げるかは自由ですから …。

あとがきに替えて

10 ページ

[最終改定 2021年 8月 8日 全 12ページ]

謎の「特設無線電話」（1：発掘編）

友人の S君が、「曰くありげなものを骨董市で入手した。」と言って、写真添付のメールを送って寄越した。



見てビックリ。名称は「特設無線電話」となっているが、アンテナがなければ無線とは信じられず、イメージは、「ショルダーフォン」の試作品。1985年登場の初代は、もっとスマートだった。肩掛け型のケースは何かの精密機械の容器を流用した気配で、その上に乗っかるのは、岩通製と思しきコンパクト電話機。1970年台の製品なので、一応辻褄は合う。

メーカーズプレート、「OMRON」は、下に小さな字で添えられた「立石電機」が当初の会社名。電子体温計から血圧計などの健康機器分野に進出しつつ、今も知名度が高いとは言えないが、産業機器分野では歴史のある会社。立石電機が何時頃、こんなものを作ったのだろうか？

(初出 Oct. 1, 2017)

謎の「特設無線電話」(2: 史実調査編)

電話の世界に「特設」なる用語が登場したのは明治に遡る。国の建設予算では中々普及の順番が廻って来ない地方の小都市が、工事費全額寄附の条件で優先開通するものを「特設電話」と称した。



1902年にその口火を切ったのが、神奈川県の鎌倉、葉山、箱根、と聞けば、その辺りの事情に納得が行く。「特設無線電話」とやら、その無線版だろうか？ 移動しながら使えるとは謳っていないから、「ショルダーフォン」の元祖と考えるのは、やや早計。それでも、電話線工事なしでの即時開通は、催し物の会場などで重宝したことだろう。その性格に鑑みると、「特設」より「臨時」の名前が相応しかったように思う。

今は、「ケータイ」と軽々しく呼ばれる「携帯電話」。ポケットに入るまでの技術の道程は遠く、開発はかなり昔に始まっている。「自動車電話」以前に、電車特急「こだま」の「車内公衆電話」があり、それに先立つ実用化試験は、客車特急「つばめ」の展望車で行われた。いずれも、1964年の新幹線開通以前の昔話。



特急「つばめ」の展望車での無線電話試験。通話者は徳川夢声氏。



特急「こだま」特別車輛、「パーラーカー」ではボーイが座席に運ぶ電話機で通話できた。

最初期の車内公衆は、普通の無線電話基地局を国鉄が自前で建設したもので、電波の届かないトンネル内は通話ができなかった。新幹線の時代になったら、トンネルばかりなので、それでは役に立たない。新しい同軸漏洩ケーブル技術でそれを乗り越えたものの、新幹線自体が北へ西へと全国展開を始めると、設備投資が馬鹿にならない。幸か不幸か、後から市場に出た「自動車電話」と「カード公衆電話」の技術を組み合わせたものが高速バスに搭載されるようになると、それを列車に転用する方が早道となり、その時点で車内公衆は使命を終えることになる。

その「自動車電話」初登場が 1979年、肩に担いで車外に持ち出せるようにした「ショルダーフォン」が 1985年。片手で持てる場所まで小さくなった「携帯電話」が、1987年。

一方、立石電機がアメリカ製デジタル電子交換機を背負って閉鎖性の高かった日本市場への参入を果たしたのは 80年台の確か前半。会社の性格として、大手が二の足を踏む市場の小さい分野でコツコツと新製品の試作を手がけていた、というのは、考えられそうな話。私の手には余るので、80年台にバリバリの現役だった K さんにバトンタッチしようと思う。想像の域を出ず、実物を見るまでは、後の時代の偽作、という可能性も捨てられないのだが …。

(初出 Oct. 3, 2017)

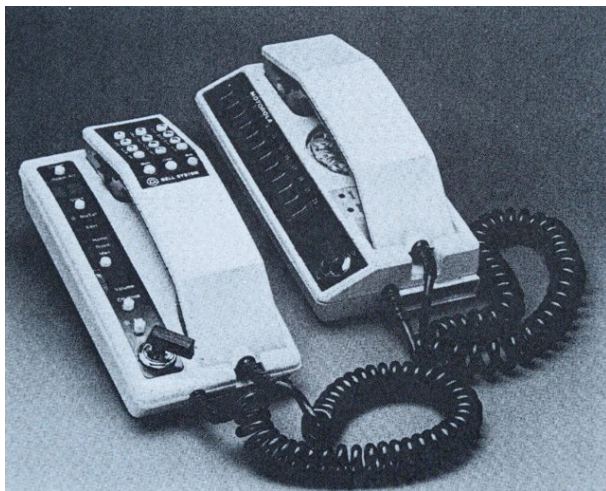
謎の「特設無線電話」(3: 海外検証編)

年に数回くらいの頻度でコンタクトのある知人から、「謎の特設無線電話」なるタイトルの興味深いメールが届きました。

「特設電話」とはビックリ、ちょっと、想像もつきません。「コードレス電話」？ 或は、FX (Foreign Extention) のような使い方では？

比較的近距离に公衆電話回線に接続された無線の親機があり、遠隔装置と一対一で通信するとか？ 或は、当時のアナログ携帯システムの初代のものでしょうか？ 当時の最新技術に、普通の電話機をそのまま流用しているのも、古き良き時代の、のんびりした空気を感じます。写真を良く見ると、後ろに昔の「トランジスタ・テレビ」が映っています。かなりのコレクターの方ですね。

立石電機なら貴兄のかつての勤務先。 然も私同様、交換機ビジネスに携わっておられた訳ですから、本件の検証にはピッタリと思い、メールを転送します。丸投げではありません。電話も自動車も世界一だった先進国アメリカの自動車電話黎明期の歴史を復習したので、以下ご参考まで。



民生用の自動車電話は、1970年台にモトローラ社がベル・システムに納めていた「パルサー」に端を発しています。運転席に取り付ける電話機部分（写真左）と、トランクに収容する無線機（写真右）が別なのは、後の日本と同じ設計思想。周波数帯は、当初 VHF でサービス

開始、後に UHF に収束しています。ソリッドステート化は当初から達成しつつ、重さ 30ポンド (= 約 13.5 Kg) とは、79年の日本最初のモデルの約 2倍。背面にチラリと見える放熱フィンが結構な消費電力の大きさを示唆します。

一方の電話機、左側が、発信番号の記憶やハンズフリー通話などの高機能を備えた「パルサー II」、右側がそれを簡略化した廉価モデルの「パルサー 100」。興味深いのは、ハンドセットの下にチラリと見える回転ダイヤルは、助走距離のない小径のものであること。それを DTMF ボタンに置換えたのが「120」モデル。両者は一時併存しています。

つまり、日本より早く自動車電話サービスが始まったアメリカでは、自動車電話という新しい市場の成立が旧来の回転ダイヤルと重なった時代が僅かながらある訳です。日本では、79年に自動車電話が登場したときから、プッシュボタン一辺倒でした。小型化が急速に進み、「ショルダーフォン」の登場が 85年。

主題の「特設無線電話」、何時頃の製品でしょうか？ 時系列の辻褄が合わないので、私はここでギブアップ。正体判明したら教えて下さい。

ところで、先述の「FX」、日本では何と呼ぶのですか？ みかけは交換機の内線ですが、専用線などを介して遠隔地へ飛ばしてしまうもの。「延長電話」かな？ そもそも、規制の厳しかった日本では許可が下りなかった可能性もあります。電電公社と商売をしていた大手四社は、日本電気、日立、富士通、沖電気。その一社に勤めつつ、アメリカ市場向けの現地作業が長かったのも、日本のことは貴兄の方が詳しいかもしれません。

日本社に 20年近く、欧州北欧の携帯電話会社に 10年、そして今のアメリカの無線設備関連会社に 13年勤続して感じるのは、日本のシステムへの危機感。一例を挙げると、外資系の方が、プロフェッショナルが多く、自由闊達で然も若いですね。オムロンは、大手に比べると小粒ながら、色々、新しいものに果敢にチャレンジする「光る会社」だったと思います。今の日本の大会社はそう言うものを失ってしまったように見えるのですが、この辺りのことは、いずれお会いしたときの話題に …。

(初出 Oct. 8, 2017)

謎の「特設無線電話」(4: レストア編)

差出人に心当たりのない宅急便が届いた。さては、従兄弟の K 君が言っていた「特設無線電話」とかの現物だな？ 嚴重な梱包を解いてビックリ、写真と違ってバラバラの部品状態。なぜバラしたのだろう？



更なる驚きは、何も聞いていない、初代「携帯電話」、モトローラの「マイクロタック」、デジタル携帯の初代など、歴代のお宝が一緒なこと。目利きのコレクターが他界、遺された品々の貴重さが判らない遺族が纏めて骨董屋に引き取らせたものを、従兄弟の友人の友人、S氏が骨董市で入手。そういう図式なのだな？ それにしても、「アナログ端末の技術」なる、昔の電話局の工事担当者向けと思しき参考書が同梱なのは誰の魂胆だろう？ 従兄弟の友人は元電電の匂いもする。何とか使える状態にレストアして欲しい。そういうお門違いを言う素人ではないと思うのだが …。

近々、昔の職場の同窓会がある予定なので、その経緯をメールで報せておいたところ、後輩 A君から早速返事が来た。曰く、「RJ-11 コネクタは、やや時代にそぐわないのではないか？」。確かに電電公社の時代には一般的でなかった。されば、元の姿に組み上げ、「驚きの鑑定結果は会場にて」という運びにするか …。

(初出 Oct. 30, 2017)

謎の「特設無線電話」(5: 公開編)

職場同窓会の当日。会場は品川駅港南口、通勤した頃の面影は丸でなく、林立する高層ビルから沸き出されるサラリーマンの半端ではない数に圧倒される。勤務先の会社統合は知りつつ、ビルまで行って見たが、それらしい看板も見当たらず、時代の終りを再認識するのみ。

同窓会の仲間は、電電公社が民営化された頃に、アメリカ製デジタル電話交換機を日本市場に根付かせる苦労を共にした同僚たち。それから40年近く、上は古稀を過ぎ、中堅も還暦前後の年廻り。

席が隣になった Mさんが、突然、「ところで、こないだのメール、何や、大昔の携帯電話の話は、どないなつたんですか？」と振って来た。前回の予告メールに質問を寄せたのは A君だけだったが、興味は持っているらしい。それならと、トイレに中座して廊下で電源を投入して持ち込むと、「トイレに鞆下げて行くのは、怪しいと思うたんや。」の声。見透かされても、幕が上がってからの野次は気にしてられない。予ての筋書き通り、席の遠い後輩に電話番号のメモを渡して電話をかけて貰うと、無事着信。まずは、ヤレヤレ。

あちこちから驚きの声上がるので、発信したスマホを廻りに手渡しで送り、通話が芝居でないことを確かめて貰う。着信側も手の届く人に渡し、尤もらしく、アンテナ角度を調整して電波の感度を探る仕草。一通話終わった途端、「発信はどないなってるんやろ？」の声は、丸で筋書きが行き渡っているかのようだ。携帯の番号を貰ってダイヤルしていると、脇から Mさんが、「10 PP やで … ほんまにかかるんかいな？」の、絶妙な合いの手。それに気を取られたら、桁間ポーズ、タイムアウト。在職中は文字通りの右腕だった K君に脇で読み上げて貰って精神集中、2度目で上手く行った。そうになると、皆酔っぱらっている場合ではなく、それぞれの技術知識を総動員しているのが顔付きにありあり。「改造したらいけないんじゃない？」「秋葉原で売ってるんやろか？」「判ったぞ。」

ここいらが潮時、逮捕される前に任意同行に応じた方が身のため、全て種明かしすることに決める。

(初出 Nov. 10, 2017)

謎の「特設無線電話」(6: 種明かし編)

「皆さん、ご免なさい。お芝居の小道具は私が作りました。要するに、電波は FOMA 携帯。恐らく、ハンズフリー通話が主目的だったコネクタのインタフェースを読み解き、アナログ回線の L1 L2 に変換して RJ-11 コネクタで渡す、というコンバータの仕業です。作っているのは、秋葉原ではなく、山口県会社。驚くのは、実利目的の法人需要が大半だそうで、携帯電話向け『カケ放題』の料金契約をビジネス用の固定電話に転用、通信費の大幅節減が需要の源とのこと。FOMA 規格は風前の灯火なので、Bluetooth にも対応済み。4万円近い価格は多くの人々に面白がって貰わないと採算が合わないため、こういうイタズラになりました。呆れて貰えれば本望な一方、本気で担がれた方には、お詫びします。」

そう言われて、担がれた、と怒る人はいない。自身の環境変化で、ここ2年程、幹事の座を降りていた Kさんが、満場一致で永年幹事に推挙されてお開きとなる。

翌朝、その Kさんから挨拶メールが着信。「昨日は久しぶりにお会いして、あの頃の話、皆様の近況など、楽しく聞かせていただきました。また、怪しいオムロン製(?)の肩掛け型携帯電話までご披露いただき、感激・感心(?)いたしました。来年は、関西関東それぞれ、或は合同での開催を …。」

(了)

(初出 Nov. 18, 2017)

(一部編集 Aug. 8, 2021)

謎の「特設無線電話」 あとがきに替えて

冒頭にお断りした通り、これは小説である。物語はフィクションだが、時代背景の技術解説に嘘はない。登場した骨董品の数々は全て、工房 Nishi の所蔵品。



前列左から、未だ現役の FOMA、中央が影の主演、浜谷製作所製の Foma => アナログのインタフェースコンバータ、右端が単三電池 8本のパック。(アイデアの内には入らないが、単三でも 1,000 mA 出るから、30分動く、というのが気付き。) 後列、真正オムロン銘版とロッドアンテナの小道具に助けられた演技派の古参、岩崎通信機の 680-A1 コンパクト電話機。

申し遅れたが、この楽屋は我が家のリビング。後方に居並ぶのは、左端がオブジェ扱いの初代「携帯電話」、TZ-803形。対する右端、メタリック回線接続で何と現用中の 601-A2 ダイヤル式電話機。殺風景に近い清貧ながら、これがほぼ普段と同じ風景である。

蛇足ながら、小説技法について。2017年のノーベル文学賞に決まった英国人作家、カズオ・イシグロ。1990年、「日の名残り」の邦題で日

本語訳が出たし、映画を観た人の数は桁が違うかも知れない。氏の作風は、専門家の分析に拠ると、「信頼の置けない語り部」というのが、他の作品にも共通する手法なのだという。一般的に、読者は小説の語り部に信頼を置いて読み進めるけれども、我々を取り巻く日常は、信用できない、或は先読みできない多くのものに囲まれている。イシグロは、それを見分ける感覚を読者に委ねたまま、小説の世界に浸ることを期待しているらしい。次元は低いですが、本稿はその様式を借りて見たかった。目まぐるしく変わる「書き手」が、実は同一人物、という仕掛け、上手く機能しなかったのは、偏に著者の未熟な筆力のため。機会を改めて、再挑戦したいと考えている。

親友からは、真面目に書く技術史の信憑性に瑕が付くから、小説はペンネームを別けよ、との忠告を戴いている。工房 Nishi のHP に掲出する性格のものなのかどうか、そこも自信はないが、埋め草としてご笑覧いただければそれで十分かと思う。

2021年 8月 8日、
どさくさ紛れのオリンピック閉会式のテレビも見ずに

西 志郎

謎の「特設無線電話」

2017年	10月	1日	メルマガ配布開始
2017年	11月	18日	メルマガ配布完了
2021年	7月	21日	PDF 電子版
2021年	8月	8日	HP PDF

Copyright © 2013 by S. Nishi

Printed in Japan